

23号 特集 この町で暮らしていてよかった

上尾市の精神保健福祉活動の展開
住民と自治体の顔の見える関係づくり
住民が声を上げ 本気になった上尾市
はじめに
増田 一世（やどかりの里）

ここ数年、保健、福祉、医療は、矢継ぎ早に大きな変化が生じている。精神保険福祉も例外ではなく、1999（平成 11）年の精神保健福祉法の改正により、2002（平成 14）年 4 月、精神保健福祉 3 事業が県から市町村へ移譲されることとなった。

市町村が精神障害者を 1 人の住民として捉え、生活保障をしていくことは、歓迎すべきことではあるが、これは国からのいわばトップダウンの流れであり、真に精神障害者の暮らしやすい状況を作り出すためには、自治体、住民双方の努力が必要である。

私は、やどかりの里が活動するさいたま市に隣接する上尾市の精神保健福祉活動がどのように形成されてきたのか、関係者の話を基に明らかにしたいと考えた。上尾市の精神保健福祉活動が、自治体と住民（民間団体）の有機的な連携があり、住民主体の活動づくりが展開されており、これからのやどかりの里の活動や各地の精神保健福祉活動の方向性に大きな示唆を与えると感じたからである。具体的には、上尾市で活動する家族会や関係者の団体がどのように活動に取り組んできたのか、自治体がどのような姿勢で精神保健活動に取り組んできたのか、さらに自治体と住民の連携がどのように行われているのかについて明らかにしていきたい。そして、その中から今後の自治体と住民の有機的な連携、住民の主体的な参加による政策づくりが、前向きに進んでいくための要素を抽出し、精神保健福祉の新しい時代をどう切り拓いていくのかについて考えるきっかけとしたい。